

藤原家隆の本歌取りに関する調査と研究 (二)

第一部 家隆の本歌取り一覽 (下)

西 畑 実

後 撰 集

やまもりはいはいはなんとかさこのをのへのさくらをりてかざさ
む(素性法師)

山もりもをらばやいはんたかさこのをのへのさくらやどしばし
かせ(春歌)

おほぞらにおほふばかりのそでもがなはるちるはなをかせにまかせ
じ(読人しらす)

大空に霞の袖はおほへどもなほ春風に花はちりけり(文治三年
皇后宮大輔百首)

やまざくらおほふばかりのかひもなしかすみの袖はなもたま
らず(建保六年十月道助法親王家五十首)

はるのいけのたまもにあそぶにほどりのあしのいとなきこひもする
かな(宮道高風)

わがこひはますだのいけのにはどりのたまもにあそぶあとはは
かなし(建保三年十一月頃内裏名所百首)

さざなみやたまもにあそぶにはのうみのかすみのひまははるか
ぜぞ吹く(承久二年四季題百首)

あたらのつきとはなとおなじくはあはれしれらむひとにみせば
や(源信明)

あたし夜のあはれはしるやよぶこどり月とはなとのありあけの
そら(建仁元年二月老若五十首歌合)

あたし夜といひてもはるにとしはへぬ月と花とよあはれとはみ
よ(西園寺三十首)

わがやどのかきねにまきしとこなつははやもさかなんよそへつつみ
む(読人しらす)

ふるさとやたれによそへてうゑおきしかきねなでしこはなさき

ぬらん（寛喜元年為家歌百首）

つつめどもかくれぬものはなつむしのみよりあまれるおもひなりけり（読人しらす）

つつみけんむかしやししのぶたちばなのほふまでにくるほたるかな（正治二年院初度百首）

たがそでにつつむほたるのころもがはおもひあまりてたまとうくらん（承久二年四季題百首）

これもまたいかなるえにかちぎりけんつつむほたるもそでにうきぬる（或処五十首）

あきのたのかりほのやどのにほふまでさけるあきはぎみればあかぬかも（読人しらす）

秋のたのかりほのやどりとふかりのこゑさへにはふはぎのうへの露（建保四年八月十五日内裏歌会）

しらつゆにかぜのふきしくあきのよはつらぬきとめぬたまぞちりける（文屋朝康）

たまぼこのみちもやどりもしら露にかぜの吹きしくをののし中原（建保三年六月二日四十五番歌合）

かみなづきふりみふらずみさだめなきしぐれぞふゆのはじめなりける（読人しらす）

神無月時雨とともにふりまがふこの葉も冬のはじめなりけり（九条前内大臣家百首）

神無月けふをはじめと時雨れどそめし木の葉の色もとまらず（擬作百首）

おもひがはたえずながるるみづのあわのうたかたひとにあはできえめや（伊勢）

きえぬべしみればなみだのたきつせにうたかた人のあとをこひつつ（元久三年三月贈定家歌）

おもひがはみをはやながらみづのあわのきえてもあはんなみのまもがな（惟明親王家十五首）

あさぢふのをのしのはらしのぶともあまりてなどかひとのこひしき（源等）

しのびわびをのしのはらおく露にあまりてたれをまつむしのことゑ（建暦二年九月二十八日内裏秋十首）

色かはるをの草葉におく露のあまりこひしき夕ぐれの空（落素百首）

ひとりねのわびしきままにおきゐつつつきをあはれといみぞかねつる（読人しらす）

うき人のかげをもみばやいみかねてながむる月に身はこがるとも（寛喜元年為家歌百首）

ころからいむべき月をながめつつあはれいくよのそらにこふらん（不逢恋）

すゞか山いせをのあまのすて衣しほなれたり人やみるらん（藤原伊尹）

すずか山あまつあらしやすてごろもかはせの浪に花ぞしほるる（建保二年二月三日内裏詩歌合）

なき名そと人にはいひて有りぬべし心とはばいかたへん（読

人しらず)

なとりがはこころのとはばむもれ木のしたゆくなみのいかにこ
たへん(建保三年十一月頃内裏名所百首)

伊勢の海のおまのまてがたいとまなみながらへにける身をぞうらむ
る(源英明)

いせのうみのあまのまてがたまてしばしうらみになみのひまは
なくとも(恋百首)

わびぬれば今はたおなじにはなる身をつくしてもあはんとぞ思ふ
(元良親王)

こひわびぬいまはたおなじかくれぬのはつせの山のくもとときえ
なん(恋歌)

おきなさび人ながめそ狩衣けふばかりとぞたづもなくなる(在原
行平)

おきなさび人ながめそこのうちにむかしをこふるつるのけこ
ろも(貞永元年四月洞院摂政家百首)

てる月をまさきのつなによりかけてあかずわかる人をつながん
(源融)

ひとこころなにつながんいろかはるまさきのつなのよるもた
まらず(建保四年院百首)

すみわびぬ今はかぎりとしなにつまぎこるべきやどとめてむ
(在原業平)

もとめすむやどのつま木ををりなれてけぶりさびしき昨日今日
かな(貞永元年四月洞院摂政家百首)

あまのすむ浦こぐ舟のかちをなみ世をうみわたる我ぞ悲しき(小野
小町)

かちをたえうらこぐふねの山もとにまたうみわたるさをしかの
こゑ(嘉禄元年三月二十九日前内大臣家三十首)

おとにきく松がうらしまけふぞ見るむべも心あるあまはすみけり
(素性法師)

思ひわび松がうらしま尋ね見ん心ある海士やなくさむるとて
(文治三年皇后宮大輔百首)

たのまれぬうき世の中をなげきつつ日かげにおふる身をいかにせん
(在原業平)

ながしとてたのむべきかはるの日の日かげにおふる身はよは
りつつ(日吉社五十首)

よろづ世を契りしことのいたづらに人わらへにもなりぬべきかな
(藤原敦敏)

恋ひしなば人わらへにもなりぬべししひてをいはんある世ばか
りも(寛喜元年為家百首)

拾遺集

はるたつといふばかりにやみ吉野の山もかすみてけさは見ゆらん

(壬生忠岑)

春たつといふばかりみしづくとしてゆくてにかすむ野辺のあけ
ぼの(承久元年七月二十七日内裏百番歌合)

はるののにあさるきぎすのつまごひにをのがありかを人にしれつつ
(大伴家持)

あさぼらけなくやきぎすの山かぜにむめのありかも人にしれつ
つ (承久三年二月二十一日内裏和歌會)

さくらがり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の影にかくれむ (読
人しらず)

あめそそぐ山ぢのはなのゆふぐれはぬるともくものかげにやど
らん (旅春雨)

さくらちるこのした風はさむからでそらにしられぬゆきぞふりける
(紀貫之)

かづらきやたかまのあらし吹きぬらしそらにしらるるはなのし
らゆき (寛喜元年為家百首)

風ふけばかたもさだめずちる花をいつかたへゆく春とかは見む (紀
貫之)

ころさへかたもさだめずなりにけりけふくれはつるはるのな
がめに (正治二年院初度百首)

わすれじのかりはこしちにかへるなりかたもさだめず花はちり
つつ (春哥)

花の色にそめたもとのをしければ衣かへうきけふにもあるかな
(源重之)

はなのいろのころもかへうきひとへやまなほしらくもはかたみ
なれども (寛喜元年為家百首)

あやしうもしかのたちどの見えぬかなをぐらの山に我やきぬらん

(平兼盛)

をぐらやましかのたちどのしるべたにたえてかげみぬさみだれ
のそら (夏歌)

松陰のいはるの水をむすびあげて夏なきとしと思ひけるかな (惠慶
法師)

あふさかの木のした水の関守はなつなきとしをいくよへぬらん
(建保三年九月十三夜内大臣家百首)

夏衣まだひとへなるうたたねに心してふけ秋のはつ風 (安法法師)
いかがするあきのはつかぜふきにけりまだひとへなるせみのほ
ころも (日吉社五十首)

おぼつかないづこなるらむ虫の音をたづねば草の露やみだれむ (藤
原為頼)

むしのねをたづねん人ぞわけそめむやどはあさちの野辺のゆふ
つゆ (建保四年院百首)

露わけてふるさと人をあちぢふにたづねば月の影やこぼれん
(日吉社五十首)

もみぢせぬときはの山にすむしかはおのれなきてや秋をしるらん
(大中臣能宣)

しかのねもまだしきほどはときは山おのれあきしるみねのまつ
かぜ (住吉社三十首)

わがやどの菊の白露けふごとにく世つもりて淵となるらん (清原
元輔)

おく露もつもりてのちのふちなればまつせきいるきくのした

水（寛喜元年女御入内屏風歌）

思ひかねいもがりゆけば冬の夜の河風さむちどりなくなり（紀貫之）

いでてくるころもでさむきかはかぜに思ひかねたるをしのこゑかな（正治二年十月頃仙洞十人歌合）

年ふればこのしら山おいにけりおほくの冬の雪つもりつつ（壬生忠見）

ゆきつもるおほくのとしの冬のいろをはるさへ見するみよしのはな（建保四年院百首）

山ざとは雪ふりつみて道もなしけふこむ人をあはれとは見む（平兼盛）

山里にけふこん人をあはれとは雪のあしたも見つべかりけり（二百首）

まつひともけふこむまではたのまれずあめふりしむるはるのやまざと（承久二年四季題百首）

きみが世はあまのは衣まれにきてなづともつきぬいはほならなん（読人しらす）

まれにくる未通女の袖やなでしこのはなさきかかる巖なるらむ（建保四年院百首）

それもよまれにうつよのおとはせじいはほをなでし天の羽衣（嘉禄元年道助法親王家十首）

世にふるに物思ふとしもなければども月にいくたびながめしつらん（具平親王）

世にふればしづのをだまきはてはまた月にいくたびころもうつらん（惟明親王家十五首）

ながむるに物思ふことのなくさむは月はうき世のほかよりやゆく（大江為基）

よそながらほかよりゆかぬわがやどの月もうきよのまちしばの露（述懐歌）

おとは河せきいておとすたきつせに人の心の見えもするかな（伊勢）

おとはがはせきいれぬいけもさみだれにはすのたち葉はたきおとしけり（夏歌）

いにしへに有りけむ人もわがごとやみわのひはらにかざし折りけん（柿本人麿）

すぎがてにをりはへてなけかざしをるみわのひはらの山ほととぎす（承元元年最勝四天王院障子歌）

みわのやまひはらのゆきのこそふりてかざしをりけるあとはみえけり（建保三年十一月頃内裏名所百首）

童田姫みわのひはらのしたつゆにをるやかざしのたまぞみだる（建保四年院百首）

かざしをる人もかよはずなりにけりみわのひはらのさみだれのそら（落素百首）

しきしまや三輪の桧原も万代の君がかざしと折りやそめけん（祝言）

鳴呼見の浦（二万葉集）
おふの海にふなのりすらんわぎもこがあかものすそにしほみつらん

か（柿本人麿）

をためごがたまものすそにみつしほのひかりをよするうらの月
かげ（建保三年九月十三夜内大臣家百首）

勅なればいともかしこし鶯のやどはととはばいかかこたへむ（読人
しらす）

いつなれてやどはととはばこたふべきいはのはざまのたにのゆ
ふぐれ（建暦二年十二月仙洞二十首）

ちはやふる神のたもてるいのちをばたれがためにか長くと思はん
（柿本人麿）

きみがよをいはふ心はちはやふる神のたもてる命ばかりに（落
素百首）

こひすてふわが名はまだき立ちにけり人しれずこそ思ひそめしか
（壬生忠見）

人しれずしのぶのうらにやくしほのわがなはまだきたつげぶり
かな（西園寺三十首）

しのぶれど色にいでにけりわが恋は物や思ふと人のとふまで（平兼
盛）

いかにしてしのびならはんほどだにもものやおもふと人にとは
れじ（落素百首）

たれゆゑのしのぶもちずりくちねただいにもいでば人もこそ
とへ（擬作百首）

いかにしてしばしわすれんいのちだにあらばあふよのありもこそす
れ（読人しらす）

わすれじのゆくすゑかはるけふまでもあればあふよをなほたの
みつ（建仁二年五月二十六日城南寺影供歌合）

ことしなほあはれとぞおもふほととぎすあればあふ世のおいの
はつねは（建保三年九月十三夜内大臣家百首）

ただいまぞいのちははてとなげくともなほゆくすゑもあらばあ
ふよを（擬作百首）

こひつともけふはくらしつ霞立つあすのはる日をいかでくらさん
（柿本人麿）

かすみたつあすのはる日はさもあらばあれよのまのさくらはな
にさかなむ（西園寺三十首）

いつしかとくれをまつまのおほぞらはくもるさへこそうれしかりけ
れ（読人しらす）

からころもひもゆふぐれのそらのいろくもらばくもれまつ人も
なし（建仁元年六月千五百番歌合）

くもれけふいりあひのかねも程とほしたのめてかへる春のあけ
ぼの（建保四年院百首）

まつ人のくもるちぎりもある物をゆふぐれあさきはなのいろか
な（九条前内大臣家百首）

ももはがきはねかくしぎもわがごとく朝わびしきかずはまさらじ
（紀貫之）

ももはかくしぎのはねがきいくかへりあしたわびしき秋にあふ
らん（承久二年四季題百首）

ゆめのごとなどかよるしも君を見むくるまつまもさだめなきよを

(壬生忠見)

おほかたのあくるまつまもさだめなきたまのをよはみこひつつ
ぞふる (或処五十首)

あひ見てはいくひさきにもあらねども年月のごとおもほゆるかな
(柿本人麿)

ゆふぐれはなはたのむかなわすられていくひさきにもならぬわ
かれは (貞永元年四月洞院摂政家百首)

いつのまにとし月のごとおもふらんあふはひとよのけさのわか
れを (恋歌)

すぎいたもてふけるいたまのあはざらばいかにせんとかわがねそめ
けん (柿本人麿)

すぎいたもてふけるいたまをわれとみよあはぬよりこそあめも
たまらね (寛喜元年為家百首)

いそのかみふるとも雨にさはらめやあはむといもにいひてし物を
(大伴像見)

わすれぬやちぎりしものをいそのかみふるともあめのゆふぐれ
のそら (建暦三年五月内裏恋十首)

あしひきの山鳥の尾のしだりをながながし夜をひとりかもねむ
(柿本人麿)

はなみつつけふはくらしつあしひきのやまどりののをながき日
かげを (建仁元年二月老若五十首歌合)

ゆきつもるまつのはさへにしだりをやまどりののをながき夜
のそら (建保四年院百首)

秋はまだとほやまどりのしだりをあまりてをしきありあけの
そら (建保五年四月十四日仙洞庚申詩歌会)

山どりのすゑをのさともふしわびぬたけの葉しだりながきよ
しも (建保六年十月道助法親王家五十首)

あしひきの山よりいづる月まつと人はいひて君をこそまで (柿本
人麿)

つきまつと人にはいひしいつはりのいまやまことのゆふぐれの
そら (承久二年八月十五夜内裏詩歌会)

わがせこがきまさぬよひの秋風はこぬ人よりもうらめきしかな (曾
禰好忠)

あきかぜにこぬ人よりもゆふぐれのくものはたてのはつかりの
こゑ (恋歌)

たのめつつこぬ夜あまたになりぬればまたじと思ふぞまつにまされ
る (柿本人麿)

いまはただまたじとおもふよなよなのふくるもつらきかねのお
とかな (正治二年院初度百首)

いかにせんこぬよあまたの郭公またじとおもへばむらさめのそ
ら (夏歌)

あさねがみ我はけづらじうつくしき人のた枕ふれてしものを (柿本
人麿)

としをへてわがくろかみもかはるなり人のたまくらふれるしら
ゆき (恋歌)

ますかがみ手にとりもちてあさなあさな見れどもきみにあく時ぞな

き（柿本人麿）

あさなあさなてにもとりえずますかがみわするる身のかげし
うつれば（貞永元年七月入道摂政家歌合）

た枕のすきまの風もさむかりき身はならはしものにぞ有りける
（読人しらず）

ものおもふ身もならはしををぎのはにいたくなふきそ秋のゆふ
かぜ（建久四年六百番歌合）

いかにせん身はならはしものものとてものきばのまつに（六家集）王のあきかぜ
ぞふく（建仁二年九月十三夜水無瀬殿恋十五首歌合）

しほみてば入りぬるいその草なれや見らくすくなくこふらくのおほ
き（大伴坂上郎女）

あかつきのとこはしほひのおもひぐさ人を見らくの夢もすくな
し（建保二年三月十日内裏和歌会）

いにし年ねこじてうゑしわがやどのわか木の梅は花さきにけり（安
倍広庭）

うぐひすのこゑもわか木のむめがえをねこじてうゑし人ぞふり
ゆく（春歌）

春きてぞ人もとひける山ざとは花こそやどのあるじなりけれ（藤原
公任）

白雲のたえぬあるじは山ざくらはなさきてこそ人とはとひけれ
（寛喜元年為家歌合）

いはばしのよるの契もたえぬべしあくるわびしき葛城の神（女蔵人
左近）

かつらきやわたしもはてぬいはばしもよるのちぎりはありとこ
そきけ（建久四年六百番歌合）

をとめごが袖ふる山のみづがきのひさしきよより思ひそめてき（柿
本人麿）

神代よりいくよかへにしをとめごが袖ふる山のみづがきの松
（建保三年六月二日四十五番歌合）

をとめごがみちのころもうちしぐれそでふる山のおきのみづ
がき（貞永元年四月洞院摂政家百首）

後拾遺集

みよしのははるのけしきにかすめどもむすぼはれたる雪の下草（紫
式部）

わがこひはゆきのしたくさむすぼはれまだうちとけみよしのの
はる（承久二年四季題百首）

心あらん人にみせばや津の国のはにわたり春のけしきを（能因
法師）

ころなき身をさへさらにをしむかなにはわたりのあきのゆ
ふくれ（建仁元年六月千五百番歌合）

なにはづにころありてやすみそめし春のけしきをみつのうら
人（承元元年最勝四天王院障子歌）

さかきとる卯月になれば神山の檜のはがしはもとつはもなし（曾禰
好忠）

このさとのならのはがしはもとつはもさびしくもあらずしげる
したくさ（建保三年九月十三夜内大臣家百首）
御田屋守けふはさ月になりけりいそげや早苗おいもこそすれ（曾
禰好忠）

ほととぎすなくや五月のみたやもりいそぐさなへもたゆみてや
ゆく（西園寺三十首）

夏かりの玉江のあしをふみしだきむれゐる鳥のたつ空ぞなき（源重
之）

ふみしだきとりだにたたぬ夏かりのたまえのあしにとふほたる
かな（江蟹）

ふみしだくたまえのあしのしたはれてしのびしとりも月にたつ
なり（江月）

夏衣立田河原の柳かげすずみにきつつならすころかな（曾禰好忠）
ならしこしかげともみえずやなぎ原たつたがはらのあきの夕ぐ
れ（貞応三年正月二十七日前内大臣和歌会）

さびしさに煙をだにもたたじとて柴をりくぶる冬の山里（和泉式
部）

さびしさに柴をりくぶる山里を思ひしりけるをの炭がま（二
百首）

さびしさにしばをりくぶるけふりだにくもればたてぬ冬のよの
月（寛喜元年為家家百首）

雪ふかき道にぞしるき山里はわれよりさきに人こざりけり（藤原経
衡）

ゆきふかみたづぬるやどはうづもれてわれよりさきのしかのか
よひち（正治二年院初度百首）

さよ更くるままに汀や氷るらん遠ざかり行くしがのうらなみ（快寛
法師）

志賀のうらやとほざかりゆく浪まよりこほりていつるあり明
の月（正治元年十二月左大臣家冬十首歌合）

月はなほかすみのしたにこほれどもみぎはにかへるしがのうら
なみ（建仁元年六月千五百番歌合）

とほざかるこゑきこゆなりほととぎす夏もやこほるしがのうら
なみ（九条前内大臣家百首）

明けぬればくるものとはしりながらなほうらめしき朝ぼらけかな
（藤原道信）

いかにせんただそのままのあさぼらけるものともないたの
みけん（落素百首）

あけぬれどくるはやすくしぐるれとなほうらめしき神無月か
な（時雨）

わするなよわするときかばみ熊野の浦の浜木綿恨みかさねん（道命
法師）

みくまののうらの浜ゆふしうたへのそでのわかれもうらみかさ
ねよ（建保三年十一月頃内裏名所百首）

夜をこめて鳥の空音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ（清少納
言）

短夜のまだくもとづるせきのとをとりはまことのねにゆるすな

り（嘉禄二年六月四日前内大臣家和歌会）

ゆくあきもとりのそらねをならひてやをしむせきちをよはにこ
ゆらん（擬作百首）

奥山にたぎりて落つる滝つ瀬の玉ちるばかりものな思ひそ（貴布禰明神）

しらなみにさはぐさはべの水とりもたまちるばかり物やかなしき（擬作百首）

有度浜にあまの羽衣昔きてふりけむ袖やけふのはふりこ（能因法師）

うどはまのあまのはごろも春もきていまもかすみのそでやふるらん（九条前内大臣家百首）

金葉集

おほ江やまいく野のみちの遠ければまだふみもみずあまのはしだて（小式部内侍）

おほえやま月もいくのすゑとほみたまゆらまたずあくるそらかな（建保三年十一月頃内裏名所百首）

世のなかはうき身にそへる影なれや思ひすつれどはなれさりけり（源俊賴）

いとひいでてこの世はよそにきくべきにうきは身にそふかげぞかなしき（貞永元年四月洞院撰政家百首）

詞華集

君すまばとはましものを津のくにのいくたのもりの秋のはつかぜ（僧都清胤）

昨日だにとはんとおもひしつの国のいくたのもりに秋はきにけり（後度百首）

津の国のいくたのもりのほととぎすおのれすまは秋ぞとはまし（建保三年九月十三夜内大臣家百首）

なくむしのひとつ声にもきこえぬはこころごころにものやかなしき（和泉式部）

いろいろの千ぐさのつゆやなくむしのこころごころのなみだなるらん（正治二年院初度百首）

千載集

難波江の藻に埋もるゝ玉かしは顯はれてだに人を恋はばや（源俊賴）

わびつつもあらはれてだにうちなげき思ふ斗も人を恋はばや（文治三年皇后宮大輔百首）

新古今集

岩そそぐたる^いみのうへの早蕨のもえ出づる春に成りにけるかな（志貴皇子）

かぜさむみたるみのこほりとけやらでなはいはそそくはるのし
らゆき（住吉社三十首）

てりもせず曇りもはてぬ春の夜の臘月夜にしく物ぞなき（大江千
里）

春は日もくもりもはてずてりもせでしくものもなきはなの色か
な（承久二年四季題百首）

ももしきの大宮人はいとまあれや桜かざしてけふもくらしつ（山部
赤人）

思ふどちさくらかざしてくらす日はななきさとの人にみせば
や（落素百首）

いとまなき大宮人のとしくれてひとりまちいづる山のはの月
（或所和歌会）

春過ぎて夏きにけらししろたへの衣ほすてふ天のかぐ山（持統天
皇）

いまよりはあきかぜたちぬしろたへのころもふきはせあまのか
ぐやま（建暦二年九月二十八日内裏秋十首）

なつごろもいつかはときをわすれぐさひもゆふぐれのあまのか
ぐやま（建保三年十一月頃内裏名所百首）

しろたへのころもほすてふ山がつかきつたには日かげやは
さす（嘉禄元年道助法親王家十首）

しろたへのころもほすなりほととぎすあまのかぐやまをりはへ
てなけ（西園寺三十首）

春ををしみあまのかぐやま袖ぬれぬあすはうづきのころもほす

とも（落素百首）

花散りし庭の木の葉も茂りあひて天てる月の影ぞまれなる（曾禰好
忠）

まれにやはあまてる夏の月はもる木のしたかげにさけるうのは
な（日吉社五十首）

さをしかのいる野のすすき初尾花いつしかいもが手枕にせむ（柿本
人麿）

さをしかのいるののすすき露をおもみたがたまくらにやどる月
かげ（建保六年九月十三夜内裏和歌会）

たがためにいるののまくらそれながらまがきのすすきとふ人も
なし（嘉禄元年三月二十九日前内大臣家三十首）

秋くれば常磐の山の松風もうつるばかりに身にぞしみける（和泉式
部）

月のいろもうつるばかりの松かぜを身にしめかねてころもうつ
なり（西園寺三十首）

さをしかのつまどふ山のをかべなるわき田はからじ霜は置くとも
（柿本人麿）

をかべなるわさだもるいほの秋のそでしもおく月にさをしかの
こゑ（建永元年七月二十五日仙洞当座和歌会）

しかなかばしもおくまでもからじたををかべのさなへなにいそ
ぐらん（擬作百首）

かささぎの渡せる橋に置く霜のしろきを見れば夜ぞ深けにける（大
伴家持）

かささぎのわたすやいづこ夕霜の雲ぬにしろき峯のかけはし
(建保五年十一月四日内裏歌合)

つきわたるしもよのかりもしろたへにつばさならぶるかかささぎ
のはし(惟明親王家十五首)

うば玉の夜の深けゆけばひさ木おふる清き川原に千鳥なくなり(山
部赤人)

ひさぎおふるさほのかはらにたつちどりそらさへきよき月にな
くなり(建仁元年六月千五百番歌合)

やたののにあさち色付く有乳山嶺のあは雪寒くぞあるらし(柿本人
麿)

あちやまやたののあさちいろづきぬ人のこころのみねのあは
ゆき(建暦二年十二月仙洞二十首)

やたの野にあられふりきぬあち山あらしもさむく色かはるま
で(建保五年十一月四日内裏歌合)

あちやまゆふひがくれのあさちはら色づきぬとやむしのなく
らん(嘉禄元年三月二十九日前内大臣家三十首)

たかき屋にのぼりてみれば煙立つたみのかまどはにぎはひにけり
(仁徳天皇)

けふりたつたみのかまどをいかかみんくもゐにのこるたかきや
もなし(述懐歌)

初春のはつねの今日の玉ははきてにとるからにゆらぐ玉のを(読人
しらす)

たまばはきてにとる程もおもひきやかりにもこひをしがの山人

(建久四年六百番歌合)

末の露もとの滴や世の中のおくれさき立つためしなるらん(僧正遍
昭)

すゑのつゆもとのしづくも鳥べやまおくれさきだつけふりなり
けり(初心百首)

すゑの露あさちがもとをおもふにもわが身ひとつの秋のむらさ
め(建永元年七月二十八日和歌所当座歌合)

あるはなくなきは数そふ世の中にあはれいづれの日まで歎かん(小
野小町)

なげけとてなきはかずそふうきよにもあるわかれこそ身はまさ
りけれ(嘉禄元年八月四十八願歌)

しら玉か何ぞと人のとひととき露とこたへてけなましものを(在原
業平)

袖のうへのなみだの玉をとふ人に露とこたへてけふもくらしつ
(建仁元年四月三十日影供歌合)

とぶ鳥の飛鳥の里をおきていなば君があたりは見えずぞあらん(元
明天皇)

あまつそら雲のはたてにとぶとりのあすかのさとをおきやわか
れん(貞永元年四月洞院摂政家百首)

いざこどもはや日の本へ大伴の御津の浜松まちこひぬらん(山上憶
良)

くれゆけばさしてぞこふるひのものとみつのはままついつとわ
きけり(建保三年十一月頃内裏名所百首)

ささの葉はみ山もそよにみだるなりわれは妹思ふ別れきぬれば（柿本人麿）

ささのはにしみつくしものよをへてはみやまもさやにころもう
つなり（日吉社五十首）

このやまはゆふ露ふかきささのはのみやまもそよにみだれてぞ
思ふ（家長勸進日吉社和歌会）

ここにありて筑紫やいづこ白雲のたなびく山の西にあるらし（大伴旅人）

しら雲のたなびく山のにしに猶心づくしの月や行くらむ（旅歌）

しなのなるあさまのたけに立つ煙をちこち人のみやとはがめぬ（在原業平）

わがこひはふじのけぶりにまがふともをちこち人をいかたとが
めむ（恋歌）

するがなるうつ山のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり（在原業平）

つたへきくむかしのゆめのかよひちもあふ人しげきうつ山の
ち（落葉百首）

神風の伊勢の浜荻折りふせて旅寝やすらん荒き浜べに（読人しらず）

ひとごころあらいそなみにをりかねてよそにやねなんいせのは
まをぎ（建保四年十一月一日内裏和歌会）

をりしかんひまこそなければ奥津風夕だつ波のあらし浜荻（嘉禎

二年七月遠島歌合）

よそにのみ見てややみなん葛城や高間の山の嶺の白雲（読人しらず）

かづらきやたかまのやまにさすしめのよそにのみやはこひんと
おもひし（建保三年九月十三夜内大臣家百首）

しら雲はよそにもみえず葛城やたかまの月に嵐吹くらし（或所
五十首）

よそながらききてもつらしかづらきやたかまのやまのみねのこ
がらし（恋歌）

おもほへず袖にみなとのさわぐかなもろこし舟のよりしばかりに
（読人しらず）

しくなみだひとりやねなん袖のうらさわぐみなどはよるふねも
なし（建保三年十一月頃内裏名所百首）

いままでに忘れぬ人はよにもあらじおのがさまざま年のへぬれば
（読人しらず）

みねのまつさはべのつるもとしくれておのがさまざまふりまさ
るらん（正治二年院初度百首）

わすれずやおのがさまざまとしふともうき身はよそのしる人に
せよ（寛喜元年為家百首）

君があたりみつつををらむいま山雲な隠しそ雨は降るとも（読人
しらず）

いこまやまむらさめとほくいづる月くももかくさぬあらしく
らし（建保三年十一月頃内裏名所百首）

夏野ゆくをじかのつのつかのまも忘れずおもへいもが心を（柿本人麿）

ありあけのなつのそらをゆく月もをしかのつのほどは見えけり（建保四年院百首）

蘆べより満ち来る潮のいやましに思ふか君が忘れかねつる（山口女王）

したもえにつのぐみわたるあしべよりみちくるしほの恋ひまさりつつ（寛喜元年為家百首）

おほよどの松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる涙かな（読人しらす）

かすみゆく松さへつらしおほよどのうらたつなみにかへるかりがね（承元元年最勝四天王院障子歌）

おほよどのまつ契りはふりぬれどいまもかはらず返るなみな（貞永元年四月洞院撰政家百首）

ゆふなみやたれをうらみてまつきるかすみの衣ぬるるかほなる（前内大臣家和歌会）

おほよどのまつもむかしのゆふぐれにうらみしなみのこゑぞかはらぬ（恋歌）

あしのやのなだの鹽やき暇なみつけのをぐしもささできにけり（在原業平）

はるの日はなだのしほやのあま人もいとまありてやくらしわぶらん（建久四年六百番歌合）

はるる夜の星かはべの螢かもわがすむかたのあまのたく火か（在

原業平）

はるの夜のやみにもかよふほたるかなあしやのさとのあまのたくひに（建保三年十一月頃内裏名所百首）

時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらに雪のふるらん（在原業平）

きえわびぬおもひのみやはふじのねのときもししらぬ雪のしたもえ（建保三年九月十三夜内大臣家百首）

おもふことやまはふじのねとしをへてかしらのゆきぞふりまさりゆく（同）

わがよをばけふかあすかとまつかひの涙のたきといづれ高けん（在原行平）

みねにおふるこれやちとせをまつかひのおよぶたけなき夏のたきつせ（西園寺三十首）

朝倉やきのまろどのにわがをればなのりをしつづ行くはたがこそ（天智天皇）

まだきより秋とぞなのるたそがれやあさくら山のよそのまつかぜ（承久二年四季題百首）

さざなみのひら山風のうみふけば釣するあまの袖かへるみゆ（読人しらす）

花やふく釣するあまの袖のうへにぬれぬなみこすしがの夕風（建永二年三月七日賀茂御祖社歌合）

あしかもの騒ぐいりえのみづの江の世にすみ難きわが身なりけり（柿本人麿）

あしがものあともさわがぬ水のえになほすみがたく春やゆくら

ん（嘉禄元年三月二十九日前内大臣家三十首）

よや寒き衣やうすきかたそぎのゆきあひのまより霜やおくらん（住吉神詠）

すみよしのさとのしもよの秋かぜにころもやうすきころもうつなり（住吉社三十首）

としをへておもひのしもにうづもれてゆきあひもみずすみよしの松（九条前内大臣家百首）

やはた山はるのさくらもかたそぎのゆきあひのしものいろは見えけり（幸清勸進住吉社和歌会）

ちぎりおきしちぎのかたそぎむなしくはゆきあひのひまのしもとときえなん（恋歌）

後鳥羽院御集

みなせやま木の葉あらはになるままにをのへの鐘の声を近づく（承元元年最勝四天王院障子歌）

ちかくととききけんかねもみなせやまおもひやりてや秋はかなしき（述懐歌）

古今六帖（『夫木和歌抄』所引）

むかし見し人をぞわれはよそにみし朝倉山の雲のはるかに（読入しらす）

よそにみていく夜になりぬひさかたやあさくら山の雲まもる月（二百首）

にほへただあさくらやまのさくらばなゆきてもをらぬよそのよそまで（春歌）

催馬楽

沢田川 袖漬くばかり や 浅けれど はれ 浅けれど 恭仁の宮
人や 高橋わたす

あはれ そこよしや 高橋わたす（沢田川）

いかにしてかげをも見ましさはた川そでつくほどのちぎりなりとも（建久四年六百番歌合）

東屋の 真屋のあまりの その 雨そそぎ 我立ち濡れぬ 殿戸開かせ（東屋）

雨そそぐまやののきばのしのぶ草しのびもあへずつゆけかるらん（初心百首）

伊勢の海の 清き渚に しほがひに なのりそや摘まむ 目や捨はむや 玉や拾はむや（伊勢海）

いせのうみのいりえのくさのしほひがたあまもはたるのたまはひろはじ（建保六年十月道助法親王家五十首）

いせのうみあまもひろはぬたまきはるいのちにかふるあふこともがな（貞永元年四月洞院摂政家百首）

伊勢物語

春日野は（古今集）

武蔵野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり

かへりみる雲のつまはこもるともやかばやかなイやかん武蔵野の原

（建仁三年八月一日後京極摂政家詩歌合）

しのぶ山忍びて通ふ道もがな人の心のおくも見るべく

としする人やしるらんしのぶやましのびてかよふおくの思ひ

を（恋歌）

秋の夜の千代を一夜になせりともことば残りてとりや鳴きなん

ほととぎすきやはあかむ夏の日のちよをひとひに鳴きくらす

とも（貞永元年四月洞院摂政家百首）

をしほ山こまつがはらになくしかはちよにひとよのみをやかふ

らん（原鹿）

あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそにひまくらすれ

さりともとまちこしものをあらたまのとしのみとせのふゆのゆ

ふぐれ（恋百首）

わが袖は草の庵にあらねども暮るれば露のやどりなりけり

わがそではくるれば露ももるやまのまつのはかけてしたもみぢ

つつ（九条前内臣家百首）

山のみなうつりてけふにあふ事は春の別れをとふとなるべし

かりそめのやどにせきいれしいけ水にやまもうつりてかげをこ

ふらし（元久三年三月贈定家歌）

源氏物語

鈴虫の声の限りをつくしてもながき夜あかず降る涙かな（桐壺）

むしのねもながきよあかぬふるさとなほおもひそふまつかぜ

ぞふく（建久九年守覚法親王家五十首）

恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらむ（須

磨）

もしほたれさのみもいかうらかぜのほせかし袖を思ふかたよ

り（嘉禄元年三月二十九日前内大臣家三十首）

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちにうらづたひして

（明石）

うらづたうらよりをちのとまびさし一よもなれしものとやは

みる（建久九年守覚法親王家五十首）

身をかへて一人帰れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く（松風）

あとしのぶやどはよもぎにうづもれてききしにもにぬまつかぜ

ぞふく（述懐歌）

たが世にか種はまきしと人間はばいかが岩根の松はこたへむ（柏

木）

たれかよにつれなきたねをまきもくのひはらのやまのいろいろも

はらぬ（恋歌）

波越ゆる頃とも知らず末の松待つらむとのみ思ひけるかな（浮舟）

ふるさとにたのめし人もすゑのまつまつらんそでになみやこす

らん（建仁元年六月千五百番歌合）

日本書紀

稻筵川副楊水行けば靡き起き立ちその根は失せず（顯宗天皇）

いなむしろふゆはこほりにしきかへてかはぞひやなぎゆく水も
なし（建保四年院百首）

和漢朗詠集

うれしさを昔は袖につつみけりこよひは身にもあまりぬるかな（読
人しらず）

ふして思ひおきても身にやあまるらん今夜の春の袖のせばさは
（建保元年二月贈定家歌）

うれしさを袖につつむとけふよりはあらはにみゆる夏衣かな
（寛喜元年女御入内屏風歌）

うれしさやかたがた袖にあまるまでさしもみかさの秋の月かげ
（西園寺三十首）

池凍東頭風度解 窓梅北面雪封寒（藤原篤茂）

風わたるいけのこほりはとけゆくをまだゆきさむしまどのむめ
がえ（文治二年御裳灌百首）

林間煖酒焼紅葉 石上題詩掃緑苔（白樂天）

たれかすむこのまのもみぢたきすててゆきのあさけもけふりた
つらん（建保三年九月十三夜内大臣家百首）

秋夜長 夜長無眠天不明 耿耿残燈背壁影 蕭蕭暗雨打窓声（白樂
天）

秋のよはまどうつあめにあけやらで雲井のかりのこゑぞすぎぬ
る（建久九年守覚法親王家五十首）

燕子楼中霜月夜 秋来只爲一人長（白樂天）

秋きてもわが身ひとつのながきよをあまりなさえそしものうへ
の月（貞永元年四月洞院摂政家百首）

不是花中偏愛菊 此花開後更無花（元稹）

はなならずにはひものちはなきものをうつろひのこれにはのし
らぎく（建久四年六百番歌合）

冬ふかみかきねのむめぞにふなるきくよりおくのはなにやあ
るらん（建久九年守覚法親王家五十首）

むらさきにしもおきかふるしらぎくのはなよりのちの冬ぞさび
しき（承久二年四季題百首）

八月九月正長夜 千声万声無了時（白樂天）

しもさゆるかはべのさとにうつころもちたびやちたびこゑぞあ
らそふ（建保五年九月右大臣家歌合）

さと人の千こゑももこゑうつころもなほなが月のよはのこしけ
り（擬作百首）

第三第四絃冷々 夜鶴憶子籠中鳴（白樂天）

よそになる人だにつらきことのねにこをおもふつも心しられ
て（建久四年六百番歌合）

おきなさび人ながめそこのうちにむかしをこふるつるのけご

ろも（貞永元年四月洞院撰政家百首）

新撰朗詠集

鳳凰池上月 送我過商山（白樂天）

月をのみ山路の友とながむれば鹿も嵐にこゑおくるなり（文治三年皇后宮大輔百首）

在明のほのかに見えし月だにもおくらぬ空にかへる秋かな（二百首）

ゆふぐれはおくらぬ月もおくりけりうのはなさけるやまのしたみち（寛喜元年為家百首）

白氏文集

別時茫茫江浸月 忽聞水上琵琶声 主人忘歸客不覺（琵琶行）

ともすれば別れ惜しまぬ浪の上にかきなすねをも人は問ひけり（建久四年六百番歌合）

詩 經

戰戰兢兢 如臨深淵 如履薄氷

みなせがほこりふみわけつかへこしわがおいらくのみちはたえにき（九条前内大臣家百首）

後記

家隆の作品については、おおよそ久保田淳編著『藤原家隆集とその研究』により、『後撰集』は小松茂美著『後撰和歌集 校本と研究』に、『拾遺集』、『後拾遺集』、『金葉集』、『詞花集』は、岩波文庫本に、『千載集』は、久保田淳・松野陽一校注『千載和歌集』に、『新古今集』、『伊勢物語』、『源氏物語』、『日本書紀』、『和漢朗詠集』、『催馬楽』は、日本古典文字大系本に、『新撰朗詠集』は、古典文庫本に、『後鳥羽院御集』は、列聖全集本に拠っている。